

研究ノート

日本人とアメリカ人の直接性と間接性 —依頼に対する断り方を通して—

荻野 綾
(関西大学大学院)

1. 序論

日本人とアメリカ人の発話スタイルに関して、“日本人は間接的、アメリカ人は直接的”という概念をよく耳にし、また、異文化コミュニケーションの視点から様々な文献においても触れられている。しかし、この日米の特徴付けはあまりにも一般化され、ステレオタイプ化されているのではないだろうか。確かに、このステレオタイプ的な概念はある程度の事実に基づいているのであろうが、これはあくまでも相対的な傾向であり、両者がいつも直接的、又は間接的であるとは思えない。したがって、この概念を過剰に一般化すれば異文化コミュニケーションの場においてお互いに誤解を生じかねないと思われる。本調査では、“日本人は間接的、アメリカ人は直接的”という概念が常に当てはまるということではないということを調べ、また、両者のこの発話特徴は場面次第で容易に反転するということを示すことを調査目的とする。更に、両者がどのような状況で断り表現を直接的、間接的にするのかということを依頼の負担度、依頼者との人間関係の面から明らかにしたい。

2. 先行研究

2.1 “日本人は間接的、アメリカ人は直接的” 支持型

日本人は間接性によって、アメリカ人は直接性によって特徴付けられるという概念は多くの文献によって支持されているが、本稿では紙面の問題上、代表的なもののみを幾つか取り上げる。まず Lakoff (1985) はアメリカ英語が speaker-based interaction、日本語が hearer-based interaction であると指摘する。つまり、アメリカ英語によるコミュニケーションでは発話による意思疎通の鍵は話し手の明示性とされる一方で、日本語では聞き手の解釈性とされる。更に、この Lakoff (1985) による speaker 対 hearer という視点からの二分化に対して書き言葉の視点、writer 対 reader を導入したのが Hinds (1987) であり、話し言葉によるコミュニケーションにおいて speaker-based responsibility を持つ文化は書き言葉によるコミュニケーションにおいて writer-based responsibility を、hearer-based responsibility を持つ文化は reader-based responsibility を持つと考えられる。人間のコミュニケーションスタイルは効果的なコミュニケーションの責任をメッセージの送り手に置くか、その受け手に置くかによって二分化することができ、英語文化は前者、日本語文化は後者であるということである。Hall (1989) もまた文化と言語の関係に着目し、メッセージの明示化度の違いによって欧米文化は low-context culture、日本文化は high-context culture に属すると指摘する。high-context culture では人々がお互いに深く関わり合っており、伝達される情報のほとんどが身体言語、もしくは個人に内在されていることから実際に言語化される情報は極めて少ないのでに対して、low-context culture では人々の個別化

が強く、伝達される情報の大半が明白な形で言語化されると考えられる。

このような日米の異なったコミュニケーションスタイルは理論研究のみならず実証研究においても示されている。Caudill & Weinstein (1969) は日米の生後 3 ~ 4 ヶ月の幼児とその母親のやり取りを調査し、人はこの時期に母親との様々な接触を通して日本人であれば nonverbal, passive communication を、アメリカ人であれば verbal communication を行うようになると指摘している。そして Caudill & Frost (1971) では被験者に日系アメリカ人の親子を追加することで、このようなコミュニケーションスタイルにおける日米差は遺伝子の問題ではなく、人が幼児期に受ける家庭教育や育つ環境の違いに起因することを示している。

2.2 “日本人は間接的、アメリカ人は直接的” 不支持型

上記のような文献からは、日本人とアメリカ人は全く異なったコミュニケーションスタイルを持っているかのような印象を受けるが、このような二分化に異を唱えるものもあり、Miller (1994) は言語の違いに関わらず直接的、間接的ストラテジーの両方が普遍的であると主張する。まず、アメリカ人の直接性に関してであるが、Miller (1994) は発話状況次第でアメリカ人も会話において詳細な情報を省略すると指摘しており、日本人の典型的な特徴として挙げられる間接的ストラテジーはアメリカ人に対しても当てはまるとしている。

The absence of explicit information is common in both Japanese and English when there is a cultural setting or situation in which there is shared background information, called ellipses, or when a formulaic expression is always used and expected. (Miller, 1994:45-46)

そもそも間接的ストラテジーについては、人は所属する文化的背景に関係なく、コンテクストに応じて発話を間接的にするものであるということが言語理論において指摘されている。Grice (1975) は、話し手は推意を通して自分が実際に発話した以上のことと伝達すると指摘しており、話し手が何らかの公理逸脱を犯した場合、その聞き手は話し手が協調の原則を遵守しているという想定の下で隠された意味を見つけ始めるとする。これを受け Yule (2000) はコミュニケーションにおいて推意を通して意味を伝達するのが話し手であり、推論を通してそれら伝達された意味を見つけ出すのが聞き手であるという点の重要性を主張する。Searle (1979) もまた話し手は自分が意図することと実際に用いる言葉が意味することとの間に直接的な関係がない形を取ることがあると指摘し、間接的発話行為の存在を説いた。つまり、話し手の一義的意味は実際に用いた文、又は語の意味からだけではなく、その発話文脈を合わせることで聞き手により認識されると考えられる。人がこのような間接的ストラテジーを用いる 1 つの理由として Leech (1983) はポライトネスの視点を重視しており、話し手は発話内容が聞き手にとって不利益な場合、文化の違いに関係なく、発話を間接的にする傾向があると指摘する。つまり、上記のような言語学者達が指摘するストラテジーは正に hearer-based interaction であり、間接的コミュニケーションスタイルが日本人だけの特徴ではないということを示すものである。

Rose (1996) もまた Miller (1994) と同様、日本人、アメリカ人共に speaker/hearer-based interaction の両方を用いていると指摘し、日本人が間接性によって、アメリカ人が直接性によって特徴付けられるというこのステレオタイプ的概念は複雑な現象の過剰一般化であり、その複雑性こそが明らかにされなければならないものであると主張する。この

点から Rose は言語使用比較における二分化表記に警鐘を鳴らし、本稿も同じ立場を取るものである。

…no single characterization is adequate to describe patterns of language use by any one group in every context, and that dichotomies are of limited value in comparing language use across groups. (Rose, 1996:78)

3. 調査方法

本調査は日本人女子大生 52 名、アメリカ人女子大学生 28 名に対して質問紙調査を行った。予備調査から断り手が男性か女性かによって、また、断る相手が同性かどうかによって断り表現が異なる傾向が見られたため、表現バリエーションの増殖を回避する意味で、本調査では被験者と質問紙内の依頼者を女性に限定した。よって、本研究はあくまでも日本と米国の女子大生が女性の依頼者に対して依頼を断る際の傾向ということになる。

本調査の質問事項のうち、本稿で取り上げるものは以下 2 点である¹。

【質問事項】

- a) 断り表現の自由記述（3 種の依頼・4 種の依頼者）
- b) どのような場面において依頼を断り難いと感じるかの自由記述

分析方法としては、場面による断りの直接性の度合いがどのように変化するかを探るために、質問紙調査から得られた断り表現の全体的考察に加え、依頼負担度と依頼者との人間関係という 2 要因毎からも考察を行った。まず、どの程度の依頼負担度レベルの下で直接性が高まるのか（以下、依頼負担度条件）を探るため、負担度の異なる以下 2 種類の依頼に対する断り表現を比較した。尚、負担度レベルに関しては、被験者全員に負担度が高いと感ずる順に番号をふってもらい、その結果、日英両被験者にとって依頼①の方が負担度は低く、依頼②の方が負担度は高いという確認を取った²。

【依頼】

- ① 明日の朝、依頼者を駅まで車で送っていくこと
(あなたは車の免許があり、また、自分の車を持っていると想定してください。)
- ② 依頼者からの会計役員要請を 1 年間引き受けること
(以下の場面を想定してください。)
 - (a)…あなたの家に町内組織の会計役員の順番がまわってきました。
 - (b)&(c)…あなたと同じサークルに所属しており、今年会計係をしていた友達が最後の仕事として次期会計役員を探さねばいけません。
 - (d)…先生が大学のある組織の会長になられ、会計の仕事を手伝ってくれるような学生代表を探しています。

次に、どのような人間関係を築いている依頼者に対して断りの直接性が高まるのか（以下、依頼者条件）を探るため、依頼者は以下 4 種類を設定した（図 1）。

【依頼者】

- a) 母親（タテ関係を軸にしているが、心的距離（=ヨコ関係）が近い）

- b) 親しい友達（ヨコ関係を軸にしており、しかも心的距離が近い）
- c) あまり親しくない友達（ヨコ関係を軸にしているが、心的距離が遠い）
- d) 先生（タテ関係を軸にしており、しかも心的距離が遠い）

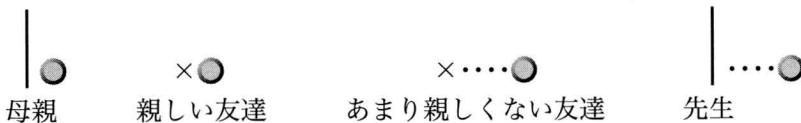


図1 依頼者との人間関係4種

質問紙調査から得られた断り表現の分析方法に関しては、Beebe,Takahashi,& Uliss-Weltz (1990) による、断りにみられる意味公式 (semantic formula) の分類表を基に各断り表現を意味公式単位に分解し、調査対象の意味公式の 1) 発現有無、2) 発現順序、3) 直接的な意味公式と間接的な意味公式の組み合わせ方法という 3 つの観点から分析を行った。直接性の高低は声のトーンや Nonverbal message など他の様々な要因によっても左右され、これら 3 つの観点が全てというわけではないが、これらの観点は本研究目的への大きな手掛けり、指標の 1 つになると見える。例えば、あるアメリカ人被験者が母親に対して依頼①を断る際に用いた表現における直接的な意味公式の分析を例にとって見てみる。

例) 直接的な意味公式の調査の場合

分析対象表現；

“Mmm...I can't tomorrow. I'm really busy. What about dad?”

⇒発話断片の意味公式；

[Pause fillers]+[Negative willingness/ability]+[Excuse]
+[Alternative suggestion]

⇒意味公式のタイプ；

[Adjuncts to refusal]+[Direct semantic formula]+[Indirect semantic formula]
+[Indirect semantic formula]



- 1) 発現有無…直接的な意味公式使用
- 2) 発現順序…2番目に使用
- 3) 組み合わせ方法…直接的な意味公式と間接的な意味公式の混合を使用

尚、上記 3 観点における直接性の高低であるが、発現有無では直接的な意味公式を用いた方が否定的立場を言葉で明確に表わしているわけであるから直接性は高くなる。次に発現順序では直接的な意味公式をより前方で用いた方が断るという意思が即座に依頼者に伝わるわけであるから直接性が高くなる。最後に意味公式の組み合わせ方法であるが、直接性レベルに応じて大きく 4 種の分類を行った。間接的な意味公式のみの使用において 1 個のみの場合と 2 個以上の場合ではどちらがより間接的であるかという点に関しては、依頼者は断り手が発した間接的な意味公式から自分の依頼が断られているという推論を導かなければならぬわけであるから、推論を行う言語的ヒントがより少ない方がより間接的であると思われる³。組み合わせによる直接性(間接性)の度合いは以下のように取り扱った。

【直接的な意味公式と間接的な意味公式の組み合わせ方法】

- 1) 直接的な意味公式のみ（1個、またはそれ以上） 直接性 高
- 2) 直接的な意味公式と間接的な意味公式の混合
- 3) 間接的な意味公式のみ（2個以上）
- 4) 間接的な意味公式 1個のみ 直接性 低



4. 分析結果

4.1 意味公式の発現有無

まず、直接的な意味公式の全体的使用割合であるが、日本人被験者（以下 JJ : Japanese-speaking Japanese⁴）は全体の 68.9%が、アメリカ人被験者（以下 EA : English-speaking Americans）は 49.7%が断り表現の中に直接的な意味公式を用い、日本人被験者の方がアメリカ人被験者よりもより直接的に依頼を断った（表 1-1）。

表 1-1 依頼毎にみる直接的意味公式の頻度

依頼	負担度	直接的意味公式を含む割合		パターン
		JJ	EA	
依頼①	低	74.7	55.6	EA < JJ
依頼②	高	63.1	44.0	EA < JJ
合計		68.9	49.7	EA < JJ

では、直接性を増大させる場面要因毎にみてみると、依頼負担度別では JJ, EA 共に依頼①においてより多く直接的な意味公式を使用した。依頼者別では、JJ は母親、親しい友達に対して、EA は親しい友達、あまり親しくない友達に対してであった（表 1-1~1-2）。また、先生に対して EA が 38.0% であるのに対し、JJ が 66.0% という高値で直接的な意味公式を用いているが、これは敬語の存在が大きいと思われる。勿論、他者を配慮した丁寧な表現は英語にも存在するが、日本語の敬語システムは“知的には同じ意味を表わす事柄を、丁寧さの異なる複数の言い方で使い分けることが可能”（岡本, 2001:60）にするため、高い丁寧度を併せ持った形で直接的な意味公式を用いることができるということが JJ の 66.0% 使用という結果に結びついたと考えられる。

表 1-2 依頼者毎にみる直接的意味公式の頻度

依頼者	直接的意味公式を含む割合			パターン
	JJ	EA		
母親	77.2	51.0		EA < JJ
親しい友達	69.8	55.1		EA < JJ
あまり親しくない友達	63.2	54.9		EA < JJ
先生	66.0	38.0		EA < JJ

次に、直接的な意味公式をその種類毎に考察してみると⁵、Performative verb は JJ によってのみ 2.9% という低値ではあるが使用され、用いられ易い場面としは、依頼②の場合、そして依頼者が先生、母親、親しい友達であった。次に、Direct “no” の使用では、JJ が 11.4%、EA は 12.6% という結果が得られた。依頼種別では JJ, EA 共に依頼②であったが、依頼者別では JJ が母親、親しい友達であるのに対し、EA はあまり親しくない友達に対してであった。最後に Negative willingness/ability では、JJ の使用者は全体の 54.6%、EA は 37.2% であった。依頼別では JJ, EA 共に依頼①であったが、依頼者別では JJ が先

生、あまり親しくない友達であるのに対し、EA は親しい友達、母親に対してであった（表 2-1~2-2）。

表 2-1 依頼毎にみる各直接的意味公式の頻度

依頼 負担度	Performative verb を含む割合		Direct “no” を含む割合		Neg. willingness/ability を含む割合	
	JJ	EA	JJ	EA	JJ	EA
依頼① 低	0.5	0	5.8	5.1	63.4	50.5
依頼② 高	5.3	0	17.1	20.0	40.6	24.0
合計	2.9	0	11.4	12.0	54.6	37.2

表 2-2 依頼者毎にみる各直接的意味公式の頻度

依頼 負担度	Performative verb を含む割合		Direct “no” を含む割合		Neg. willingness/ability を含む割合	
	JJ	EA	JJ	EA	JJ	EA
母親	3.3	0	31.5	12.2	42.4	38.8
親しい友達	3.1	0	10.4	12.2	56.3	42.9
あまり親しくない友達	1.1	0	3.2	23.5	58.9	31.4
先生	4.3	0	1.1	2.0	60.6	36.0

以上の結果は以下 3 点にまとめられる。

- 日本人話者の方がアメリカ人話者よりも高頻度で直接的な意味公式を断り表現の中に用い、より直接的に依頼を断る傾向が見られた。
- 日本人 / アメリカ人話者では直接的な意味公式を使用する依頼負担度条件は一致し、共に低い場合であったが、直接的な意味公式をその種類別に見ると、Performative verb と Direct “no” は全体的使用頻度が低く、仮に使われたときも用いられる依頼負担度が高い場合に集中しているのに対し、Negative willingness/ability は使用頻度が全体的に高く、その使用は依頼負担度が低い場合に多いという傾向が見られた。つまり、Performative verb と Direct “no” の使用は強い直接性に、Negative willingness/ability の使用は弱い直接性に属し、日本人 / アメリカ人話者共に異なった 2 つの直接性レベルを場面に応じて使い分けていると考えられる。
- 日本人話者とアメリカ人話者では依頼者との関係条件が異なり、日本人話者は既に心的距離が近い依頼者、又は、(直接性を緩和する機能を持つ) 敬語を用いることができる先生に、アメリカ人話者は対等で心的距離が遠い依頼者に直接的になる傾向が見られた。

4.2 意味公式の発現順序

では次に意味公式の発現順序であるが、直接的な意味公式の全体的発現順序は、JJ は 31.6% で二番目のスロット、19.4% で三番目のスロットが多いのに対し、EA は 22.1% で二番目のスロット、21.1% で一番目のスロットであった（表 3-1）。つまり、間接的表現との相対的位置関係でいうと、日本人被験者の方がアメリカ人被験者よりも何らかの間接的な意味公式の後で直接的な意味公式を用いる傾向が強いことが明らかになった（表 3-1~3-2）。また、直接的な意味公式の発現位置が JJ は 1 番目から 5 番目まで確認されたのに対して、EA は 1 番目から 4 番目までであったことからも、JJ が EA よりも直接的意

味公式の前に多くの間接的意味公式を使用する傾向を持っていることが窺える。

表 3-1 依頼毎にみる直接的意味公式の発現順序 [JJ]

依頼	負担度	直接的意味公式を含む割合				
		1番目	2番目	3番目	4番目	5番目
依頼①	低	5.8	30.5	29.5	7.4	1.1
依頼②	高	17.1	32.6	9.1	2.1	1.6
合計		11.4	31.6	19.4	4.8	1.3

表 3-2 依頼毎にみる直接的意味公式の発現順序 [EA]

依頼	負担度	直接的意味公式を含む割合			
		1番目	2番目	3番目	4番目
依頼①	低	18.2	28.3	6.1	2.0
依頼②	高	24.0	16.0	0	2.0
合計		21.1	22.1	3.0	2.0

更に場面要因毎にみてみると、依頼種別では、JJ は依頼負担度が上がると直接的な意味公式の前方性を若干強めたものの、依頼①においても依頼②においても変わらず二番目の位置に最も多く用いたのに対し、EA は依頼①においては二番目、依頼②においては発話冒頭に最も多く用いた（表 3-1~3-2）。次に、依頼者別では、JJ は母親に対しては発話冒頭、あまり親しくない友達と先生に対しては三番目の位置にも多く用いたが、先ほどの依頼の負担度条件の場合と同じく、全依頼者に対して二番目の位置に最も多く用いた。一方、EA は母親と先生には二番目の位置に、親しい、あまり親しくない友達には発話冒頭に用いた（表 3-3~3-4）。

表 3-3 依頼者毎にみる直接的意味公式の発現順序 [JJ]

依頼者	直接的意味公式を含む割合				
	1番目	2番目	3番目	4番目	5番目
母親	22.8	39.1	13.0	1.1	0
親しい友達	13.5	32.3	17.7	2.1	3.1
あまり親しくない友達	5.3	28.4	25.3	4.2	0
先生	4.3	26.6	21.3	11.7	2.1

表 3-4 依頼者毎にみる直接的意味公式の発現順序 [EA]

依頼者	直接的意味公式を含む割合			
	1番目	2番目	3番目	4番目
母親	20.4	28.6	2.0	0
親しい友達	20.4	18.4	4.1	6.1
あまり親しくない友達	31.4	21.6	0	2.0
先生	12.0	20.0	6.0	0

以上の結果は、以下 2 点にまとめられる。

1. アメリカ人話者の方が日本人話者よりも直接的な意味公式を前方で用いる傾向が見られた。つまり、アメリカ人話者は直接的な意味公式そのものを用いる頻度は日本人話者よりも少ないが、いざ直接的な意味公式を用いて断るとなれば、その意味公式を日

本人話者よりも前方に置き、より直接的に断る傾向があると思われる。これは、英語では結論を先に言うという逆ピラミッド型の構成を思い出させる結果である。

2. 日本人話者とアメリカ人話者では直接的な意味公式を前方に移動させる依頼負担度条件と依頼者条件が異なり、日本人話者はアメリカ人話者よりも固定的な形で直接的な意味公式の発現順序を持ち、特に二番目の位置での発話を好むのに対し、アメリカ人話者は負担度が高い場合、そして依頼者が対等な関係の場合、発話冒頭へ移動させ、日本人話者よりも直接性を強める傾向があると思われる。

4.3 直接的な意味公式と間接的な意味公式の組み合わせ方法

では次に直接的 / 間接的意味公式の組み合わせ比較を考えてみよう。4種の組み合わせ方法をその直接性が強い順に見ていく。まず、直接的な意味公式のみで構成された断りであるが、JJは全体の7.2%が、EAは5.5%がこの最も直接的な表現を用いた（表4-1）。依頼負担度別に見てみると、JJ, EA共にこの断りを依頼②において最も多く使用したが、JJはその使用が依頼②に集中しているのに対し、EAは両依頼に対して同程度用いた。依頼負担度が低い場合においても負担度が高い場合と同程度用いたという点においては、全体の割合は低いものの、EAの方がJJよりも直接的であったと言える。依頼者別では、JJは母親に対して他の依頼者よりも圧倒的に多くこの直接的表現を使用したのに対して、EAはあまり親しくない友達に対して最も多く用いた（表4-1~4-2）。

表4-1 依頼毎にみる直接的意味公式だけで構成された断り

依頼	負担度	回答割合		
		JJ	EA	パターン
依頼①	低	2.6	5.1	JJ < EA
依頼②	高	11.8	6.0	EA < JJ
合計		7.2	5.5	EA < JJ

表4-2 依頼者毎にみる直接的意味公式だけで構成された断り

依頼者	回答割合		
	JJ	EA	パターン
母親	15.2	4.1	EA < JJ
親しい友達	7.3	6.1	EA < JJ
あまり親しくない友達	5.3	9.8	JJ < EA
先生	1.1	2.0	JJ < EA

第二に直接的な意味公式と間接的な意味公式の混合から構成された断りであるが、この種を用いたのはJJが68.4%、EAが47.7%であった（表5-1）。依頼負担度別では、JJ, EA共に依頼①においてより多く使用した。依頼者別では、JJは母親に対して、EAはあまり親しくない友達に対して最も多く使用したが、日米共に依頼者の違いによる使用差はほとんど見られず、直接的な意味公式を用いてハッキリと断るもの、間接的な意味公式を加えることでその直接性を緩和することのできるこの断り表現は、日米間で共通の一般的断りだと考えられる（表5-1~5-2）。

表 5-1 依頼毎にみる直接的 & 間接的意味公式混合で構成された断り

回答割合				
依頼	負担度	JJ	EA	パターン
依頼①	低	74.2	54.5	EA<JJ
依頼②	高	62.6	41.0	EA<JJ
合計		68.4	47.7	EA<JJ

表 5-2 依頼者毎にみる直接的 & 間接的意味公式混合で構成された断り

回答割合				
依頼者		JJ	EA	パターン
母親		76.1	51.0	EA<JJ
親しい友達		68.8	49.0	EA<JJ
あまり親しくない友達		63.2	52.9	EA<JJ
先生		66.0	38.0	EA<JJ

第三に間接的な意味公式のみで構成された断りであるが、全体的使用割合は JJ が 31.6 %、EA が 52.3 %であり、既に見た第一、第二の断りとは使用頻度差パターンが EA < JJ から JJ < EA へと反転した（表 6-1）。依頼負担度別では、JJ, EA 共に依頼②においてより多く使用し、依頼者別では、JJ はあまり親しくない友達に対して、EA は先生に対して最も多く用いた（表 6-1~6-2）。

表 6-1 依頼毎にみる間接的意味公式だけで構成された断り

回答割合				
依頼	負担度	JJ	EA	パターン
依頼①	低	25.8	45.5	JJ<EA
依頼②	高	37.4	59.0	JJ<EA
合計		31.6	52.3	JJ<EA

表 6-2 依頼者毎にみる間接的意味公式だけで構成された断り

回答割合				
依頼者		JJ	EA	パターン
母親		23.9	49.0	JJ<EA
親しい友達		31.3	51.0	JJ<EA
あまり親しくない友達		36.8	47.1	JJ<EA
先生		34.0	62.0	JJ<EA

第四に間接的な意味公式 1 個のみで構成された断りであるが、この最も間接的な断り方を用いたのは JJ が 6.1%、EA が 13.6% であった（表 7-1）。依頼別では、先ほどの第三の断り方と同様、JJ, EA 共に依頼②においてより多く使用し、依頼者別では、JJ は母親に対して、EA は母親と先生に対して最も多く用いた（表 7-1~7-2）。ここで注目すべき点は、JJ と EA の母親に対しての使用である。両者共に母親に対して他の依頼者よりも多く使用してはいるが、両者の使用は全く同じ断り表現に属するわけではなく、その使用には JJ と EA の異なる動機付けがあるようである。つまり、同じ間接的な意味公式 1 つ構成でも、その 1 つに何を選んだかである。EA は全て謝罪や理由などといった相手との今後の人間

関係を考慮したものであったが、JJ の場合は依頼者への批判、例えば“町内会の仕事はお母さん達の仕事やろ！”といったような断りが多数見られた。EA では依頼自体は受け入れられているのに対し、JJ では依頼そのものが拒絶されている。いわば、門前払いなのである。このことから、間接的表現というものは一般的に politeness に繋がると考えられるが、実際には、間接性は politeness/impoliteness という 2 つの相反する面を併せ持つということが窺い知れた。どのようなコンテクストにおいて、どのような発話をするかによって、間接的表現は正反対の態度表明（例えば、この場合、表面的「丁寧さ」に対して、実質的「非難」）を行うこととなる。ちなみに、JJ の間接的な断り表現の攻撃的使用は母親に對して以外は見られず、JJ の母親に対する極めて強い直接性を示すものである。

表 7-1 依頼毎にみる間接的意味公式 1 つだけで構成された断り

回答割合				
依頼	負担度	JJ	EA	パターン
依頼①	低	4.7	11.1	JJ < EA
依頼②	高	7.5	16.0	JJ < EA
合計		6.1	13.6	JJ < EA

表 7-2 依頼者毎にみる間接的意味公式 1 つだけで構成された断り

回答割合			
依頼者	JJ	EA	パターン
母親	10.9	16.3	JJ < EA
親しい友達	4.2	12.2	JJ < EA
あまり親しくない友達	3.2	9.8	JJ < EA
先生	6.4	16.0	JJ < EA

以上の結果は以下 3 点にまとめられる。

- 日本人話者は直接的な意味公式を含む断り表現を好む傾向が強いのに対し、アメリカ人話者は直接的な意味公式を含まない断り表現、つまり間接的な意味公式から成る表現を好む傾向が強いということが示された。
- 日本人 / アメリカ人話者共に強い直接性と弱い直接性を場面に応じて使い分けており、直接的な意味公式のみで構成された断りは使用頻度が低く、また、依頼負担度が高い場合に多かったのに対し、直接的な意味公式と間接的な意味公式の混合から構成された断りは使用頻度が高く、また、依頼負担度が低い場合により多く使用される傾向が見られた。
- 日本人 / アメリカ人話者では、直接性を使い分ける依頼者条件が異なり、JJ は既に心的距離が近い依頼者、とりわけ母親に直接的な断りを、対等で心的距離が遠い依頼者に間接的な断りを用いるのに対し、EA は対等で心的距離が遠い依頼者に直接的な断りを、タテ関係にある依頼者、とりわけ先生に間接的な断りを用いる傾向が見られた。

4.4 自由記述

最後にどのような場面において依頼が断り難いかという自由記述の結果であるが、これまでの 3 つの観点からの調査を通して日米間の直接性変動には異なる依頼者条件が存在することが既に窺えたが、この自由記述でもその差異が顕著に現れた。最も日米間で差が

現れたものが親に関してであり、親が依頼者の場合、依頼が断り難いと答えた者がJJでは0%だったのに対して、逆にEAでは35.7%であった。続いて、依頼者が親しい人の場合は、JJが5.8%、EAが53.6%、依頼者があまり親しくない人の場合は、JJが9.6%、EAが21.4%であった（表8）。つまり、JJは既に親密な関係にある依頼者に対して直接的になれるのに対し、EAはそれとは逆に、まだ親密な関係にない依頼者に対して直接的になれるという傾向が自由記述においても示された。

更に、この質問事項は任意の形で設定したにも関わらず、日本人被験者よりも多くのアメリカ人被験者が依頼を断り難い条件として何かしらの依頼者を挙げた。このことから、アメリカ人被験者が、少なくとも日本人に比べて、場面要因として対人関係に敏感であることが窺える。依頼を断り易い依頼者と断り難い依頼者に対してでは断る際に選択するストラテジーが異なってくるわけであるから、日米間で存在する異なる依頼者条件は直接性／間接性を使い分ける対象者のズレにつながる。つまり、その依頼者条件における差異に留意しなければ円滑な異文化コミュニケーションの支障となる確率が極めて高いと考えられるのである。

5. 考察

以上の調査を通して、全体的に見た場合には日本人話者はアメリカ人話者よりも直接的に依頼を断ったという結果と同時に、場面別に眺めた際には“日本人は間接的、アメリカ人は直接的”という概念を支持する幾つかの結果も得られた。要するに、「日本人は間接的、アメリカ人は直接的」という概念が常に当てはまるわけではなく、場面次第で直接／間接の特徴付けは容易に反転するという第一の調査目的は示されたと考える。その反転に繋がる複雑性の背景には、断りというものが依頼者のフェイスを脅かす非常にデリケートな発話行為であること、対人関係に対する異なる価値体系が日米間であることが挙げられる。

第二の調査目的、どのような状況で日本人話者とアメリカ人話者の断り表現が直接的／間接的になるのかという場面要因に関しては、両グループ間で直接性を調節する依頼負担度条件は類似しているが、依頼者条件が異なっているという結果が得られた（図2）。まず直接性においては、日米共に強い直接性と弱い直接性の2つを使い分けていることが示されたわけであるが、全体的な直接性自体は、日本人話者は低い負担度、近い依頼者、アメリカ人話者は低い負担度、対等で遠い依頼者の場面において強くなる傾向が見られた。更に直接性を細かく見ると、弱い直接性は低い負担度、高い直接性は高い負担度の場合においてと依頼負担度の条件のみが変化する傾向が見られた。次に間接性においては、日本人話者は負担度が高い場合、依頼者が対等で遠い関係にある場合、アメリカ人話者は負担度が高い場合、依頼者がタテ関係で遠い関係にある場合に強くなることが示された。

依頼の負担度が高まれば、表現面で全体的な直接性が下がるという反比例関係は、依頼の負担度が大きいほど一般的に依頼者が直面している問題がより深刻であるということから、そのような状態では頼まれた側は直接的に依頼を断り難く、また断るという行為に被験者が罪悪感を感じることが考えられる。また、依頼者条件と直接性（間接性）の関係における日米差については、土居（2001）が指摘する甘えの概念が大きな鍵となると思われる。

表8 断り難い場合

断り難い場合	JJ	EA
依頼者が親	0% (0人)	35.7% (10人)
依頼者が親しい人	5.8% (3人)	53.6% (15人)
依頼者が親しくない人	9.6% (5人)	21.4% (6人)
依頼者が年上	13.5% (7人)	7.1% (2人)

相手が自分に一番近い身内殊に親の場合は普通あまり罪が自覚されないが、これは両者が密着していて、どんなに裏切っても許されると言う甘えがあるからであり、日本人は裏切りが関係の断絶に導き易い義理的な関係の中で最も罪悪感を経験する。(土居, 2001;64)

つまり、日本人話者は既に親密な関係を築いている依頼者に対しては、断っても許される、後の人間関係に影響を及ぼさないと感じているのに対し、アメリカ人話者は土居の言うこの甘えが、少なくとも日本人話者よりも希薄な傾向にあることも、両者の違いの一因として考えられそうである。

【直接性】

日本人話者	低い負担の依頼+近い人間関係
アメリカ人話者	低い負担の依頼+対等で遠い人間関係

【弱い直接性】

日本人話者	低い負担の依頼+近い人間関係
アメリカ人話者	低い負担の依頼+対等で遠い人間関係

【強い直接性】

日本人話者	高い負担の依頼+近い人間関係
アメリカ人話者	高い負担の依頼+対等で遠い人間関係

【間接性】

日本人話者	高い負担の依頼+対等で遠い人間関係
アメリカ人話者	高い負担の依頼+タテ関係で遠い人間関係

図2 日米の依頼負担度条件と依頼者条件

以上のことから“日本人は間接的、アメリカ人は直接的”という明確な二分化は全体的傾向を簡潔に描写でき、両者の一般的特徴を大枠で掴むことができることから、分かりやすく、相互理解に便利ではあるが、個別の場面毎の傾向を掴みきれていないことを頭の隅に置いておくことが重要であると思われる。表層的な一般論の背後には、一言では言い表せない複雑な深層が隠れているのである。日常生活における依頼に対する断り場面においては、日本人はアメリカ人よりも直接的に成り得るし、また、直接的/間接的な表現が許される相手も日米では正反対になる傾向が強く見られるわけで、依頼者が誰であるのかという場面が日米両者の断りにおける直接性/間接性の鍵を握っていると言える(図3)。人がコミュニケーションを行う際、そこには様々な要素が複雑に絡み合ってくる。その中で人は場面に応じたコミュニケーションスタイルを選択するのであり、“日本人は間接的、アメリカ人は直接的”という国籍や文化に沿った明確な二分化には十分な注意が必要なのである。

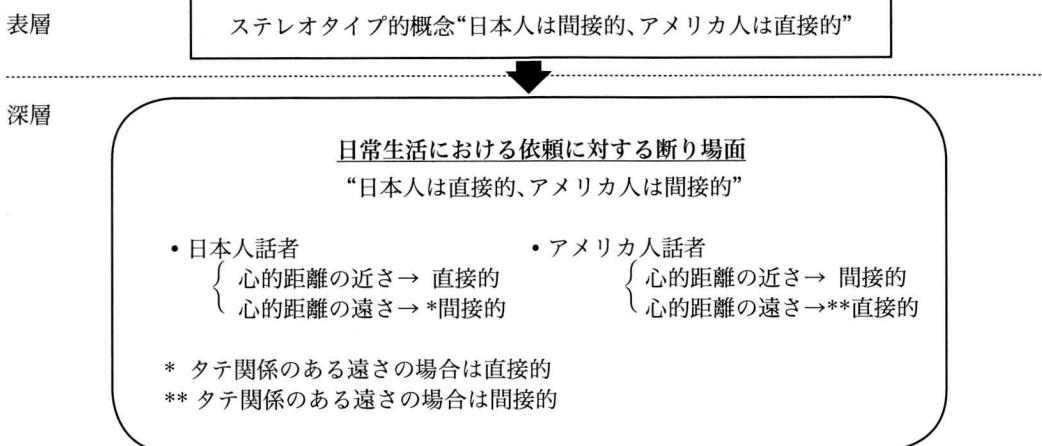


図3 日米の直接性 / 間接性における表層と深層

6. 今後の課題

今後の課題としては、まずデータ収集方法の多様化、第二に意味公式の分類表の再検討、第三に言語理論側面からの分析強化が必要であると考える。データ収集方法に関しては、本来、その妥当性を得るために話し言葉と書き言葉による両データを調査する必要があり、数個の方法論を併用することが望まれるが、今回は時間的な制約から質問紙調査のみの実施となり、本調査の結果はどちらかというと書き言葉に近いデータとなった。これは被験者が心に抱く基本的な断り方、つまり本音を探ることが可能である一方で、実際に依頼者に面と向かって依頼を断る際には質問紙に書かれた断り表現が幾らかの変化を受ける可能性は否めない。よって今後はロールプレイ、映画や小説の会話表現、コーパスなど、生のやり取りに近いデータを集め、多角的に分析することが必要と考える。

次に意味公式の分類表の再検討に関してであるが、直接性 / 間接性を探る尺度としては限界があると思われる。例えば、Negative willingness/ability は 1 つの意味公式にまとめられてはいるが、厳密には両者は同レベルではなく、意思の無さ (=Negative willingness) を伝えることは能力の無さ (=Negative ability) を伝えるよりも直接性は高く、したがって丁寧度が低いと思われる。より精密な分析のためには、まずこの意味公式分類表を分類し直す必要が不可欠と言える。

最後に言語理論側面の分析強化に関しては、本調査から断りという発話行為には断り手の複雑な心理と、聞き手の推論プロセスが働いていることが見られたことから、その分析には話し手が用いる表現の背後にある言語使用に関する原理と、発話解釈にかかる原理を十分に吟味する必要性があると考える。以上 3 点を踏まえ、今後はより精密な調査と分析を行いたい。

注

- 1 本調査では更なる調査目的のため、日本人被験者に対してのみ英語での断り表現記述と 2 種類の自由記述をも実施した。本稿は本調査の一部を取り扱うものであり、その他の部分は紙面の問題上、言及しないことにする。
- 2 当初、依頼は 3 種類を設定しており、依頼①が負担度は最小、依頼②が負担度は最大、そしてもう 1 つの依頼が負担度は中程度という確認を被験者から取り、分析を行った。しかしその分析途中で

- 負担度が中程度の依頼は比較上の問題を有することが発覚したため、全データから削除し、その結果、本研究では依頼①と②、つまり依頼負担度が低い場合と高い場合の比較となっている。
- 3 間接的意味公式 1つ構成の断りと 2つ以上構成の断りに関しては、理論的には前者の方がより間接的であると思われるが、その是非については今後調査を行い、確認を取る必要があると考える。
 - 4 本調査では 3種のデータ比較を行っており、その比較の便宜上、日本人の日本語データを Japanese-speaking Japanese (JJ)、日本人の英語データを English-speaking Japanese (EJ)、アメリカ人の英語データを English-speaking Americans (EA) と記した。
 - 5 Beebe, Takahashi, & Uliss-Weltz (1990) は直接的な意味公式をまず 2種類に分類する。I refuse.などの performative verb を用いた Performative statement とそれを用いない Nonperformative statement である。Nonperformative statement は更に 2種類に下位分類され、1つは No、もう 1つは I can't.などの Negative willingness/ability である。

参考文献

- Beebe, L., Takahashi, T., & Uliss-Weltz, R. (1990). Pragmatic transfer in ESL refusals. In R. Scarcella, E. Andersen, & S. Krashen (Eds.), *Developing communicative competence in a second language* (pp.55-73). New York: Newbury House.
- Caudill, W., & Frost, L. (1971). A Comparison of Maternal Care and Infant Behavior in Japanese-American, American, and Japanese Families. In William Lebra (Ed.), *Maternal Health Research in Asia and the Pacific*, 3, (pp.1-26). Hawaii: East-West Center Press.
- Caudill, W., & Weinstein, H. (1969). Maternal Care and Infant Behavior in Japan and America. *Psychiatry*, 32, 12-43.
- Hinds, J. (1987). Reader versus writer responsibility. In U. Connor & R. Kaplan (Eds.), *Writing across languages* (pp. 141-152). Reading, MA: Addison-Wesley.
- Hall, E. (1976). *Beyond Culture*. New York: Doubleday.
- Lakoff, R. (1985). The pragmatics of subordination. In *Proceedings of the Tenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*. Berkeley: Berkeley Linguistics Society.
- Leech, G. (1983). *Principles of pragmatics*. London: Longman.
- Miller, L. (1994). Japanese and American indirectness. *Journal of Asian Pacific Communication*, 5, 37-55.
- Rose, K. (1995). American English, Japanese, and Directness: More Than Stereotypes. *JALT Journal*, 18, 67-80.
- Yule, G. (2000). *Pragmatics*. Oxford: Oxford University Press
- 岡本真一郎 (2001)『ことばの社会心理学』京都：ナカニシヤ出版
- 土居健郎 (2001)『甘えの構造』東京：弘文堂